

## 認知症透析患者の社会的支援と課題について

長崎腎病院 長崎腎クリニック

○藤原久子 林田めぐみ 澤瀬健次 佐々木修 一ノ瀬浩 橋口純一郎  
原田孝司 船越哲

### 【はじめに】

透析患者であるかどうかにかかわらず、我が国は超高齢社会に向かっているが、高齢者を支援することは安易ではない。さらに認知症透析患者の支援については『ハイレベルな支援』が必要となる。今回は敢えて困難症例を報告し、考察・課題提示とする。ここでハイレベルの意味するものは、一般的認知症のケアに加えて、

- ①定期的通院が不可欠、
  - ②食事・水分管理が必須、
  - ③毎回長時間の透析時間に耐える事、
- と難関度は極めて高い。以下、我々が経験した4症例を提示する。

### 【症例】

- (1) 82歳男性、透析日を忘れてしまい、自由奔放に外出する独居認知症透析患者に対し、キーパーソンの協力を得ながら独居を続けさせ、最終的には入院で看取った。
- (2) 76歳女性、主たる介護者が高齢及び障害者であるにもかかわらず、介護サービスを利用して在宅で看取った。
- (3) 84歳男性、認々介護の為に透析拒否傾向となったが、施設入居で対応した。
- (4) 82歳女性、キーパーソンが患者を虐待したため、行政に訴え虐待制度を活用し、特養に保護入所に対応した。上記全てにおいて精神科医へ受診させ、認知症の診断と対応について相談した。

### 【考察】

すべての症例に共通する事は、重症の認知症があっても、人権を守られ、敬意を持たれ、人格を尊ばれていたことである。この結果をもたらしたものは、

- (1) その人らしさを考えチームで社会的支援体制を作ったこと、
- (2) 困難症例がゆえにより連携が強化されたこと、
- (3) 精神科医の介入、
- (4) 潤滑油としてMSWとケアマネージャーが機能したこと、と考える。

### 【今後の課題】

認知症透析患者の社会支援は日々整備されつつあり、これらを有効活用する事で何とか対応可能である事が理解できよう。しかし「キーパーソンが不在」というケースは真の困難症例である。2000年から成年後見人制度が施行されているが、現在のところ機能されていない場面が多く、今後の課題といえる。